

メッセージアウトライン

コリント人への手紙 第一7:17~24「召されたままの状態」

[17]「ただ、おのおのが、主からいただいた分に応じ、また神がおのおのを召しになったときのままの状態です。私は、すべての教会で、このように指導しています」 「主からいただいた分」とはおのおのが置かれている立場、環境、賜物。

「召し」とは、救いに召されること、すなわち信仰をもって救い主イエス・キリストを信じ、神との交わりに入れられること。人はどのような状態で召されても、そこにおいて、神との交わりにうちに信仰生活を着実に歩いていくことが勧められている。パウロはこのことを、すべての教会で指導していると言い、彼が神によって立てられた権威ある使徒であることを示している。

[18-19]「召されたとき割礼を受けていたのなら、その跡をなくしてはいけません。また、召されたとき割礼を受けていなかったのなら、割礼を受けてはいけません。割礼は取るに足らぬこと、無割礼も取るに足らぬことです。重要なのは神の命令を守ることです」割礼はユダヤ人の祖先アブラハム以来、神の選びの民として、祝福のもとにあることの契約のしるしとして男子の体の一部の皮を切り取るもの。→創世記17:9~14

ところが彼らはローマとの戦争に負けて以来、当時のギリシャ、ローマ世界で生きていくためにユダヤ人としてのしるしは不利であるとして、割礼の後を手術で隠そうとする者があった。また逆に異邦人でクリスチャンになった者はユダヤ風なものに引かれて割礼を受けるといった動きもあったようである。しかし、パウロは形式的な割礼、無割礼は取るに足らぬことと切り捨て、重要なのは神の命令を守ることであると言う。

[20]「おのおのが自分が召されたときの状態にとどまっていなさい」

おのおのが自分が召されたとき、救われたときのままの状態です。これが結論。

[21-22]「奴隷の状態で召されたのなら、それを気にしてはいけません。しかし、もし自由の身になれるなら、むしろ自由になりなさい。奴隷も、主にあって召された者は、主に属する自由人であり、同じように、自由人も、召された者はキリストに属する奴隷だからです」

当時のキリスト教会の中には、一般市民、自由人とともに奴隷も混じっていた。しかし、教会は奴隷を奴隷以上の者、愛する兄弟として受け入れているのである。→ コロサイ3:11、ピレモン16 宗教的な差別の典型が割礼と無割礼の問題であったとするならば、社会的な差別の典型が奴隷と自由人の問題であった。しかしパウロはそのような外見を気にするよりも召されたままの状態にとどまることを勧める。そのような状態で福音に生きていくことによって、それはパン種のように働き、人を内側から変え、そしてこの世を変えていくのである。望みはイエス・キリストにある。→イザヤ42:1~4

「…もし自由の身になれるなら、…」とは当時の奴隷はわずかでも賃金をもらえ、それを長年貯めておいて、それをういて、ついに奴隷の身分から解放されるということがあったからである。そのことが可能ならば、そのようにすることも勧められている。

22節にあるように、主に召された奴隷は主に属する自由人であり、主に召された自由人は主に属する奴隷である。このようにパウロは奴隷の状態にある者に深い慰めを与える

と同時に、一般の自由人に対してはその自由を自分勝手に使うのではなく、キリストのしもべとして生きるようにと鋭い警告を与えている。

[23-24]「あなたがたは、代価をもって買われたのです。人間の奴隷となってははいけません。兄弟たち。おのこの召されたときのままの状態、神の前にいなさい」

クリスチャンは奴隷も自由人もどのような状態にある人も、イエス・キリストの十字架の血潮によって贖われた者である。それなのに、またもやこの世の人間の物差しや価値判断によって左右され、それらに縛られ、つながれクリスチャンとしての生き方をそこなってはならないのである。神の恵みを無にしてはならない。24節は内容的には17、20節と同じ。おのこのは神によって信仰に召されたときのままの状態、神の前にとどまり続けることが大切である。→ I コリント15:58